

# 2011 10 あけぼの

## 今、夫婦とは？—— そのかけがえのなさに 気づくとき

**特集対談** それでも夫婦、かけがえなし 小林由紀子×山田太一  
「日常」に支えられている夫婦の絆—大震災の経験を受けてシェガレ・オリビエ  
平和の同志でもある私たち夫婦糸数慶子

“ことばの社”への小道 Part II / 子どもは地域で冒険遊びをしながら育つ—<sup>30年以上続く</sup>「羽根木アレーパーク」で お相手・首藤万千子、齊藤何奈 / 山根基世  
ミステリアスな日々 / 男と女 木崎さと子  
活憲とヒューマンライツ (人権) / 脱原発をきっかけに市民の時代へ 伊藤千尋  
光と風のおくりもの / ネット上の散歩 三浦暁子  
キリストの足跡 / 聖徒の交わり 百瀬文晃

連載







首藤万千子

しゅうとう・まちこ  
羽根木プレーパーク世話人



齊藤何奈

さいとう・なな  
羽根木プレーパーク世話人



山根基世

やまね・もとよ  
NHK退職後たちあげた、有限責任事業組合「ことばの杜」代表。著書「ことばで「私」を育てる」「ことば」ほどおいしいものはない」ほか。



第10回



# 子どもは地域で冒険遊びをしながら育つ

—30年以上続く「羽根木プレーパーク」で

お母さんたちも繋がり合える

**山根** この羽根木プレーパークは一九七九年にできて、今年で三十二年になりますね。資金と場所は区が提供し、あとは住民の自主運営、日本で最初の「冒険遊び場」の常設で、できたときにはずいぶん話題になりましたが、今も同じ仕組みが機能しているのでしょうか？

**首藤** 世田谷区に羽根木、世田谷、駒沢はらっぱ、烏山の四つのプレーパークができて、二〇〇五年にNPO法人「プレーパークせたがや」を立ち上げましたが、現在は世田谷区児童課の管轄で区のプレーパーク事業として同じように続いています。

**山根** デンマークで始まっていた「冒険遊び場」を伝えた大村慶一さん夫妻がこのプレーパークの元になる考え方を持ってもらって、それをどのように受け継いでいらっしやいますか。

**首藤** イギリスのアレン卿夫人が書いた「都市の遊び場」に、都市計画が専門の大村慶一さんがアメリカで出会い、夫妻でその本を翻訳し、その後スウェーデンやデンマークに実際に行かれて日本に紹介しながら、地域の仲間と実験的に始めた活動が評価され、国際児童年の七九年に記念事業として世田谷区が始まりました。IPA（子ども遊ぶ権利のための国際協会）という団体とのつながりもでき、お連れ合いの大村璋子さんがIPA日本支部の初代代表になりました。IPA事務局長さんが羽根木プレーパーク開設前に来日され、盛り上げてくださいましたし、世田谷区公

園課の本田さんとの出会いもありました。本田さんはご自分もこういう公園を作ったかった、と。

**山根** いいタイミングに皆さんが出会ったんですね。

**首藤** 公園課の方たちも尽力してくださいますし、いろいろな部署の方がかかわり、いい公園ができる、と楽しみにしてくださいようです。

**山根** 首藤さんは、どういうことからここに関わられるようになったんですか。

**首藤** 今二十三歳になる上の子が三歳のとき、男の子で動き回るし泣いてばかりいるし、当時は赤堤に住んでいたのですが、嘔みつきくせのある子で（笑い）今にして思うと子どもなりの理由があったのでしょうか、当時はそのことで私はピリピリしていました。そのうちプレーパークというものがあったよ、と教えられてここに来たんです。ここで嘔みついたら、反撃されるし（笑い）周りも「やるじゃん」で終わって。（笑い）

**山根** いろんな子がいるよ、という感じで。

**首藤** 全然問題にもならず。私もすぐくホッとします。そのとき二人目の子が赤ちゃんだったのですが、自主保育の預け合いサークルに。

**山根** そういうサークルもあったのですか。

**首藤** 今もあります。「自主幼稚園ひろば」で幼稚園に行かず、ここで預け合い保育をして育てたい、というお母さんたちが活動していて、三十年以上になると思います。

**山根** 「ピッピの会」というのもありますね、それはまた別ですか？

**首藤** それは預け合わないんです。お母さんた

ちが子どもを連れてきて楽しむ。

**山根** ここを舞台にしてお母さんたちの繋がりがあちこちでできていくわけですね。

**首藤** 生活の中でも「お願い預かって」とやり取りしながら子どもを育て、地域だから小学生、中学生、高校生になって、うちの子今荒れるの（笑い）と言ったり、自分も調子悪いとか、夫とうまくいけなくなったりとか、そんな話をしながら……。

**山根** そのようなことがそこら中にあるという認識が今は持ちにくいですよ。孤立して、母と子が問題を抱え込んで。周りにはいろんな人がいるのに見えないで。

**首藤** ここで話ができるとすごく安心するんですよ、自分だけじゃない、と思えて。

**山根** このプレーパークのいちばん大きな特徴が、自分の責任で自由に遊ぶ。できて間もなくのころ、子どもが腕の骨を折ったそうですね。

**首藤** 事故が起きたのですが、そのときに、その考え方がないと自由な遊びを守れない、とそのとき運営していた方たちが考えた言葉です。

**山根** 自由なだけに、ずいぶん思い切ったこともやらせますよね。まず火を使う。それから料理もさせるし、水をかけ合ったり、ドロをかけ合ったり……きまりはない。

**首藤** 禁止事項がない遊び場ということ。木の相当高いところまでロープがあつて子どもが登ります。

**山根** 親として心配なことはないのですか？

**首藤** いや心配でしたよ、私は。うちは上の子が二十七歳なのですが、その子が小さいとき回

う側の公園で遊ばせていました。

そこは十五人ぐらいの大きな集団で一人一人の違いが気にならない。次第にお互いのバックグラウンドも知っていくと、いろいろな経験をしている人がいて、お互いに行き合えることをして、助け合いながら子育てをしました。だんだん子どもの行動範囲が広がり、その公園からはみ出たこの梅林を散歩したりしているうちに、友達が、子どもが脇にいるのに大人がチェーンソーを使つてバリバリ木を伐っているわよ、と。危ないわねえ、文句を言わなきゃ、と見に来て、何も言えずに帰りました。（笑い）向こうにある丸太の椅子と机、今は三代目ぐらいですが、その初代の物を作っていると分かって、あつけにとられて通りすぎ、しばらく皆で何回か通りすぎたりしているうちに、ある日「ピッピの会」によく分らないけどツロツロ入って。

**首藤** 楽しみに子育てをしている。

今常駐のプレーリーダーは三人いるのですが、当時はまだ一人でした。

**山根** プレーリーダーの役割はどういうものですか？

**首藤** 子どもに一番近い人間として、子どもの言葉にならないことを聴いて、読み取り、代弁したり、表現していく。同時に社会にもちゃんと発信していく。子どもたちと遊んだり話したりする中から気づくものをきちんととらえて、それに対してどうしていいかと考える、要の人間ですね。

**山根** かなり重い役割ですね。

**首藤** 親は子どもが小さい年齢のうちには子どものことはよく分かっていますが、大きくなってく



ると分からなくなったりすることもあります。ですからここで一緒に遊ぶ中で子どもがふっと気を許すときにつぶやく言葉から感じ取る。でもその子が望まなければ勝手に動くことはないです。だけれどその子が本当は自分はこうしたいと言っていたら、自分の口から言えるように練習台になるなどして、本人が向かっていけるようにサポートします。

**山根** 自分がやらなければいけないのだ、と自覚できるような方向に仕向けていく。

**齋藤** 遊びにはそういう力があると思います。

**山根** 遊ぶことの中にもものすごく大事なものがあつのに、今親たちは勉強、勉強と言つて……自分たちも変わりましたか？

**首藤** 自分がしたいような子育てができたような気がします。世の中の人がしていることをしないと不安な気持ちになりがちですが、この人たちはそれぞれ、私はこう考えるからこうする、と。それで自分も皆の言うことを聞きながら、自分はこうしたい、と考えて行動でき、そしてそれで大丈夫だと分かりました。

**山根** いわゆる世間一般の情報だけで動いていると焦りますよね。

**首藤** 幼稚園をどこにしようか、と思つていると、先輩のお母さんたちが、どこに行つたつて一緒に。(笑い)あ、そうか、と妙に腑に落ちるといふか。

**齋藤** 夕方帰りながら、これから晩御飯作るのかーと思つていたら、うちはこれからパスタ茹でてレトルトのソースかけるだけ、と。ええっ？(笑い)手をかけたものがないのかな、と思つていたけれど、それでもいいのかなと。毎日のこと

でもないし。

**山根** 子どもの育て方だけじゃなくて、家事の手の抜き方まで教えてもらつて。

**齋藤** イライラしながら作るより、手抜きしながら笑つて楽しくご飯を食べたほうがいいし。

### 語り合える「ご近所」の公園

**山根** 私は今、子どもの言葉を育てる活動をしています。子どもたちが言葉が足りなくて、自分の気持ちを表現できなかったり、周りの人といひ人間関係を築けなかつたりするので、そういうことのちゃんどできる子どもたちを育てたいと思つて五年目になります。いろいろな教育の現場を見て歩いて、地域社会が崩壊しているの、その地域社会を作らなければならぬと思つていたので、ここに、ある意味で都会で失つてきた地域社会のよなものが出てきました。

**齋藤** 子ども時代に大事なものは、朝起きて「おはよう」「おはようございます」と言いながら家から出ていったり、あの子はだれの子、と地域にバシして。(笑い)あの子は挨拶しなくなつたね、と思春期になつたのを周りの大人が分かつている。突つ張りになつて返事もしないよ、というのがかわいい。そういう地域の大人の目は子どもがいないと育たないし、子どもも大人がいれば育つし、大人なしには育たない。ところが今は子どもの声がうるさいと言つて、学校に怒鳴り込んだりする時代です。両方とも育たないですよ。

**山根** 今は自分の子だけしか見えないお母さんが多くなつていますが、それは不幸ですよ。

**齋藤** 思春期になつたら自分の子は見ないほうがいいんですよ。(笑い)

**首藤** 中学校になるとほんとにそうですよ。うちの子も帰ると不機嫌な顔をして。(笑い)親の言うことなんて聞かないからいやになつちゃうけど、よその子はお母さんのことを「ちよこちよこ」言つても、かわいいわーと。(笑い)

**山根** お二人とも上のお母さんが二十三歳と二十七歳。成長した後はどうしておられますか。この会は終わるのですか。

**首藤** でもここに来ていて、ということは、延々と。

**山根** 親の繋がりは残るわけですか。

**齋藤** 子どもの手があいたら次は親の介護の話が出てきていますね。

**山根** そうか、子育てで繋がつたお母さんたちが今度は介護で繋がつてくる、と。

今日本は「孤族の国」と言われていますが、これからこういう関係が必要ですよ。

**首藤** 五か月のお子さんがいる若いお母さんがここに来るまでは育児のやり方をインターネットで調べていたと。ここに来ていろんな人と話して、ああ、こんなに大らかでいいんだと分かつてすごく楽になつた。

**山根** とこでこの建物はまた新しく、木が使われていて、香りがいいですね。

**首藤** 今年の四月にできた檜作りの家です。

**山根** 筒抜けの作りで、どういふ目的で作つた家なのかしら？

**首藤** 奥の室内は基本的に乳幼児とお母さんたちのために週三日開けています。



(上) たき火を使って子どもも一緒に今日の昼食準備。(中) 入口に掲げられているフレイバークでの約束。(下) ふきぬけの「家」で話をきく



**山根** 両側に縁側があつて家中窓という感じで。  
**首藤** 子どもの遊び場での建物を手がけているデザイナーさんが工夫して設計してくださり、大工さんも日本の伝統工法をやってみてもいいかと遊んでくれました。

**山根** こういう場があるとないとでは違いますか？

**首藤** 建ててみたらやっぱり違いましたね。抛り所になるようです。一人で来ると入りにくかった方が縁側に座られたり、そこで会話が生まれるし、遠路沿いの掲示板を見ている人に、どうぞと声をかけると入ってこれる。建てる目的が、たぐさんの親子に外遊びを自由に楽しんでほしい、地域の人と交流してもらいたい、ということと、道を通りかかる方たちにも声をかけ合いながら。

**山根** 散歩中の犬もこつちを見えていますよ。仲間に入ってきてきそうですね。歩いている人からもうつでも声をかけられる。これが本当の双方向ですね。

**首藤** 公園の中に家を建てるにはさまざまハードルがあり、世田谷区の公園緑地課の方が、粘り強く付き合ってくださっているいろんな制度をクリアしてできました。

**山根** 積み上げてきた先輩たちの力が導いてくれたという感じですね。公園でたき火をするのも消防署の許可を得たと。夏でもたき火の周りに人が集まり、あるなしで全然違いますね。

**齋藤** 開園当初は消防署に毎日許可を求めたそうです。今では冬に子どもだけでなくお年よりもたくさん集まりますし。

**首藤** 思春期の子どもたちのためにも動きがあります。

**齋藤** 走り回って一緒によく遊んでいた子どもたちが二、三年で思春期を迎え、青年になる。あつという間です。でも見かけは大きくなって金髪になつていても中身は全然変わらぬ。小さなうちの子どもと遊んでいるのを見て、外見は変わつても関係は壊れない、と思えて。

**山根** でも子どもたちを支える必要があるとお感じになった。

**齋藤** 開園から十年くらい経ってからのことですが、一人で初めてここに来るような子が増えてきました。よくよく話を聞くと、家や学校のことなどいろいろ悩んでいて、ときには家出をしたいということもあり、思春期の子どもたちを支える必要があると感じるようになりました。

**山根** 支えるためにどういうことをしてらっしゃるのですか。

**齋藤** 具体的には繋がる相手、弁護士やソーシャルワーカーなど、相談するルートを見つけています。

**首藤** 親自身も悩んでいるので今、親が話すことができるセルフケアグループワークの会を作ろうとしています。問題はすぐには解決しないのですが、皆で自分の気持ちを話したり、聞いたりしながら、延々と付き合おうと。

**山根** 聞いてもらう相手がいるだけでも違うでしょうね。

**齋藤** 子どもは自分の状況をよく分かっていて暴れたり、何か壊すことですませています。だから、子どもがそうしながらも日々暮らしている力はつけてもらいたいと願っています。

**首藤** 同じ立場で親として気持ちは分かるし、あの思春期の子どもたちと暮らすのはものすごくエネルギーがいるよね、でも過ぎていくよ、と。

**山根** そういう話を若いお母さんが聞くと、ああそうか、そしてこんなに元気に乗り越えていける、と気持ちになりますね。お母さんの底力を見る思いがします。